●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 7 -12

テレビ

目次

要　約 …… 2

はじめに …… 4

1．視聴時間の意味 …… 6

- 視聴時間の意味 …… 6
- テレビをがまんしているか …… 7
- どんな番組を見ているのか …… 10
- チャンネル権はなくなった …… 13

2．テレビ視聴と自己像 …… 16

- 生活がきちんとしているか …… 16
- 学業成績との関係 …… 18
- 達成意欲に関連して …… 20
- 進路との関わり …… 22

3．視聴態度をかたちづくるために …… 24

- テレビへのコミット …… 24
- テレビの効用 …… 27
- テレビ台数との関係 …… 29
- テレビ環境の影響 …… 30
- テレビを見るきまり …… 33

まとめに代えて …… 35

子ども研究ノート ⑪
海外の子どもたち …… 深谷昌志 …… 36

資料1　調査票見本 …… 46

資料2　学年・性別集計表 …… 52

調査レポート／テレビ

要　約

①視聴をがまんしているか

視聴時間の短い子は、テレビが嫌いなのでなく、見たいテレビ番組をがまんしている(図3、表2)。

②視聴時間と見ている番組

視聴時間の長い子たちは、娯楽番組やマンガを見ているのに対し、短い子たちはそうした番組をがまんしている(図5、図6、表4、表5)。

③視聴時間と自己像

視聴時間の長い子たちは、生活がきちんとしていないと思っている(図8、表8)。

④視聴時間と意欲

視聴時間の短い子たちは、未来に対して意欲的な態度をもっている(図10、図11、表12)。

調査概要

1.調査主題　テレビ

2.調査視点　現代の子どもたちはさまざまな情報にかこまれて生活している。この情報化社会の進展が子どもたちにどのような影響を与えるのか。この号ではテレビとのふれ合いが人間形成にどのような意味をもつのかを考えていきたい。

3.調査項目　テレビの視聴時間／見ている番組／テレビを見てどう思うか／テレビを見るきまり／どんなおとなになりたいか

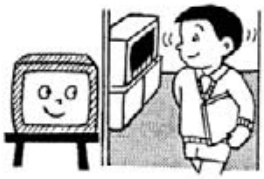
放送大学教授　深谷昌志

⑤視聴時間と体調

視聴時間の長い子たちは疲れやすく、食欲がないと答えている(図13、表13)。

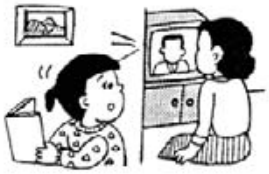
⑥テレビの台数

テレビの台数がふえるにつれて、子どもたちの視聴時間が長びく(図16、表17)。



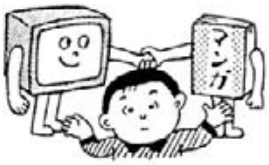
⑦テレビ環境

テレビの音が聞こえているような環境のもとだと、子どもたちの視聴時間は長びく(図17、表18)。



⑧マンガとテレビ

テレビを長く見ている子は、マンガも読んでいる割合が多い(図18、表21)。



⑨テレビを見るきまり

視聴時間の短い子は、自分なりにきまりを決めてテレビを見ている(図19、表22)。

4.調査時期　昭和62年9月－10月
5.調査対象　大阪、愛知、神奈川の小学4・5・6年生
6.調査方法　学校通しによる質問紙調査

7.サンプル数　(人)

学年／性	男子	女子	計
4年	178	184	362
5年	284	285	569
6年	249	229	478
計	711	698	1,409

はじめに

活字メディアの登場

この号では、子どもとテレビとのつき合いにふれようとしている。当然のことながら、現代の子どもたちは、押しよせる情報の洪水の中で生活している。テレビはむろんだがラジオや雑誌、新聞など、さまざまなメディアを通して、最新の世界中の情報が子どもたちの耳に届く。

子どもたちが、そうしたかたちでマスメディアの中で暮らし始めたのは、それほど昔の話ではない。活字メディアに限るなら、発行部数を考えると『立川文庫』(明治44年)や『少年倶楽部』(大正3年)の発刊あたりが、子どもたちが雑誌を手にした始まりであろう。

しかし、これらの雑誌はいわば活字メディアであるから、月に1回、あるいは正月や盆などのこづかいをもらったとき、子どもの世界に入ってくる客にすぎず、立ち読みや友だち仲間での回し読みを入れても、情報量は多いといえなかった。

放送メディアの始まり

そうした子どもの世界に放送メディアが届き始めるのは、昭和7年6月(大阪のJOBKでは昭和3年5月)関屋五十二と村岡花子とが1週間交代で「コドモの新聞」を始めた頃からで、これは大正14年にラジオの本放送が始まってから8年後のできごととなる。といっても「コドモの新聞」は、午後6時から20分までの「子供の時間」に続く5分番組であるから、全部の時間を合わせても30分にみたない。こうしたラジオ時代は昭和30年代まで続くが、この間昭和22年7月には「鐘の鳴る丘」が始まり、子どもたちの人気を集め、昭和25年末まで790回にわたって放送されたので「鐘が鳴りますキン・コン・カン」を聞いて育ったかたも多かろう。

テレビ放送の幕あき

なお、わが国でテレビ放送が始まったのは、昭和28年2月、そしてテレビの受信契約台数は、昭和33年の100万台から35年の500万台を経て、37年3月には1000万台を超え、家庭当たりのテレビ普及率はほぼ5割に達する。

この間すでに、昭和31年にはアメリカのテレビ映画「スーパーマン」、人形を使った「チロリン村とくるみの木」の放送が始まり、さらに昭和33年2月に、国産テレビ映画の第1号として「月光仮面」が登場している。

その他、「名犬リンチンチン」「名犬ラッシー」「あんみつ姫」「ブーフーウー」「ザ・ヒットパレード」など、育った年代によって思い出に残るテレビ番組はことなるのであろう。

さらにまた、昭和38年には国産初のアニメ映画として「鉄腕アトム」が作られ、以下「鉄人28号」「おばけのQ太郎」「巨人の星」などが続いて現在にいたっている。

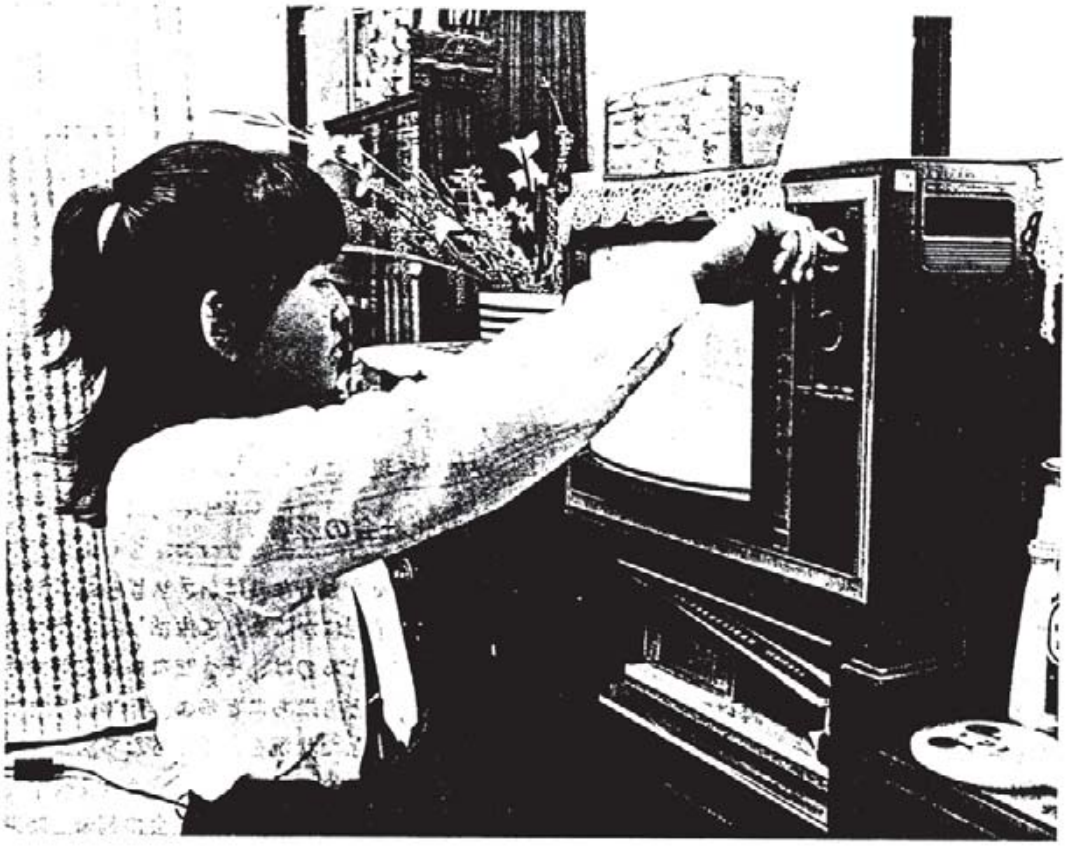
情報化社会の影響

もちろん子どもたちは、テレビの他にもさまざまな情報にかこまれて生活している。ここで問題となるのは、そうした情報化社会の進展が、子どもたちにどのような影響を与え、そしてそうした状況を、子どもたちがどう感じているかであろう。

特に日本の場合、情報化社会の到来と時期を同じくするかたちで、子どもたちの遊び仲間の崩壊が始まり、子どもたちの間に放課後自分の家にこもって、テレビやマンガとともに時を過ごす生活が定着している。

この号では、そうしたかたちでのテレビとのふれ合いが、子どもの人間形成にどのような意味をもつのかを考えていきたい。

1．視聴時間の意味



視聴時間の意味

図1に、子どもたちの視聴時間を示した。もちろんこれは、子どもたちが思っている視聴時間であって、客観的に測定したものではない。

子どもたちは、平均して2時間半程度をテレビ視聴に費しているといわれる。しかし、実際に子どもたちが、テレビとのつき合いにどのくらいの時間を費しているのかをとらえるのは、考えているほどやさしくない。

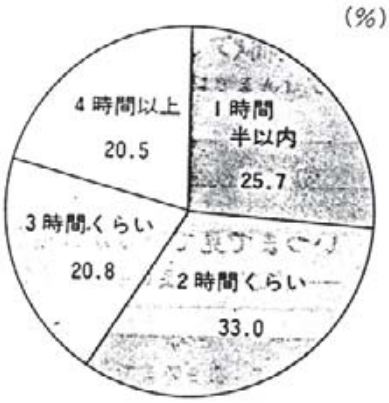
具体例をあげてみよう。朝、起きて朝食を食べる。当然、テレビがついていよう。それをぼんやりながめる。あるいは帰宅したら、テレビがついていた。テレビをBGMにして、マンガのページをめくりながら、おやつを食べる。そして入浴をして、居間に戻ると音楽番組をやっていたので、ちょっとながめていた。

テレビ視聴というとき、ふつうはそうした時間を計算に入れていないことが多い。したがって、一般にいわれているより、子どもたちの視聴時間は長いのではないかと思う。

それはともかく、主観的であるにせよ、子どもたちの視聴時間に、図1のようなひらきが生じたのは、すでにふれた通りである。そこでそうしたひらきが、どのような背景から生じ、そしてそれがどういう意味をもつのかを考えていこう。

図1　テレビの視聴時間

――4時間以上も多い――



テレビをがまんしているか

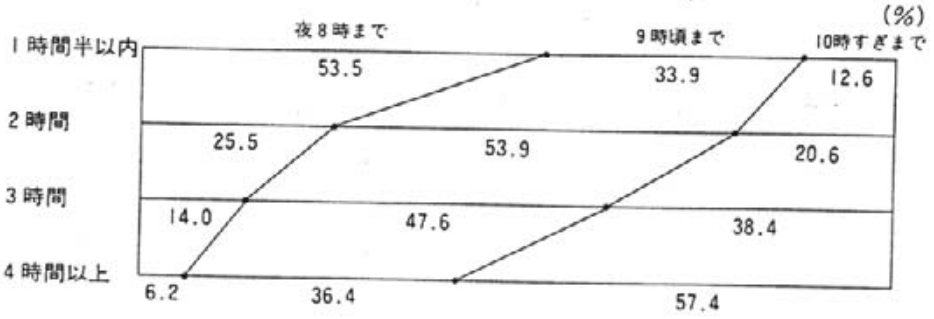
まず、図2（表1）に目を通してほしい。視聴時間の短い子は、当然のことながら夜8時から9時頃まで、テレビを見ているにすぎない。それに対し長時間視聴児は、夜遅くまでテレビを見つめている。そうであるから、長時間視聴になるのであろう。

それでは、短時間しかテレビを見ていない子どもは、本来テレビが嫌いなのであろうか。図3（表2）が示すように、視聴時間の短い子のうち「とても」の14%に、「少し」を含めると73%の子はテレビをがまんしている。それに対し、テレビを長い間見ている子の8割以上は、好きなだけテレビを見ていると答えている。

したがってテレビの視聴時間は、テレビの好き嫌いを示しているのではなく、どのくらいテレビをがまんしているのかを示すバロメーターといえよう。つまり、テレビの嫌いな

図2　いつまで見ているか×視聴時間

――4時間以上見ている子は夜10時すぎまで――



子はいない。視聴をがまんしているかどうかで視聴時間が決まるのである。

そうしたことを裏書きするかのように、「好きなだけテレビを見てよかったら」の問いに、子どもたちはあと30分か、あるいは1時間くらい、よぶんにテレビを見たいと答えている（表3）。どんなに長く見ていても、見あきることはなく、もう少し見ていたいと思う。それが、テレビのもつ特性なのかもしれない。

表1　いつまで見ているか×視聴時間

——視聴時間の長い子は夜遅くまで——

(%)

	夜7時まで	夜8時まで	夜9時まで	夜10時まで	夜11時まで	それ以上
1時間半以内	16.1	37.4 (53.5)	33.9 (87.4)	10.9 (98.3)	1.1 (99.4)	0.6
2時間	2.2	23.3 (25.5)	53.9 (79.4)	19.0 (98.4)	1.4 (99.8)	0.2
3時間	0	14.0 (14.0)	47.6 (61.6)	33.6 (95.2)	4.4 (99.6)	0.4
4時間以上	0.7	5.5 (6.2)	36.4 (42.6)	42.3 (84.9)	13.0 (97.9)	2.1

（　）は累積

図3　視聴をがまんしているか×視聴時間

——短時間視聴児のがまん率は7割——

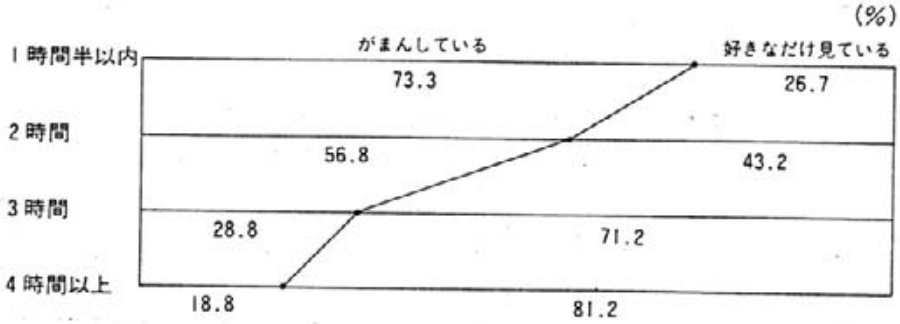


表2　視聴をがまんしているか×視聴時間
——短時間視聴児はがまんしている——

(%)

	がまんしている		好きなだけ見ている	
	とても	少し	わりと	十分
1時間半以内	14.2	59.1	22.7	4.0
2時間	1.9	54.9	38.9	4.3
3時間	0.4	28.4	62.5	8.7
4時間以上	0.5	18.3	61.3	19.9

表3　好きなだけ見てよかったら×視聴時間
——今より、もう少し長く——

(%)

	今くらいでよい	長く				
		30分	1時間	1時間半	2時間	3時間
1時間半以内	35.4	30.9	18.3	7.4	4.0	4.0
2時間	29.1	29.3	26.6	5.6	6.5	2.9
3時間	32.6	19.6	28.6	10.7	4.9	3.6
4時間以上	35.0	14.5	21.0	9.4	9.8	10.3

どんな番組を見ているのか

これまで、テレビの視聴を長さとの関連でとらえてきた。しかしテレビの視聴は、どのような番組を見るかによって、もつ意味がことなってくる。

筆者が放送大学というテレビやラジオのメディアを使う大学に勤めているからいうのではないが、本来テレビは、映像を映しだす装置であって、その装置で何を見ているのかは個人差が大きい。

ＮＨＫの市民大学講座、野球中継、そしてホームドラマ、さらにナイトショー、ポピュラー音楽など、テレビはさまざまな内容を伝えている。そして子どもたちは、図４のように「オレたちひょうきん族」のような娯楽番組や「キン肉マン」のようなマンガ番組を見ている割合が高く、さすがにニュース番組や時代劇をいつも見ている子は、それほど多くはない。

そこで、見ている番組のジャンルと視聴時間との関連を示すと、図５（表４）のような結果がえられる。

長時間テレビを見ている子どもたちは、「オ

図４　見ている番組

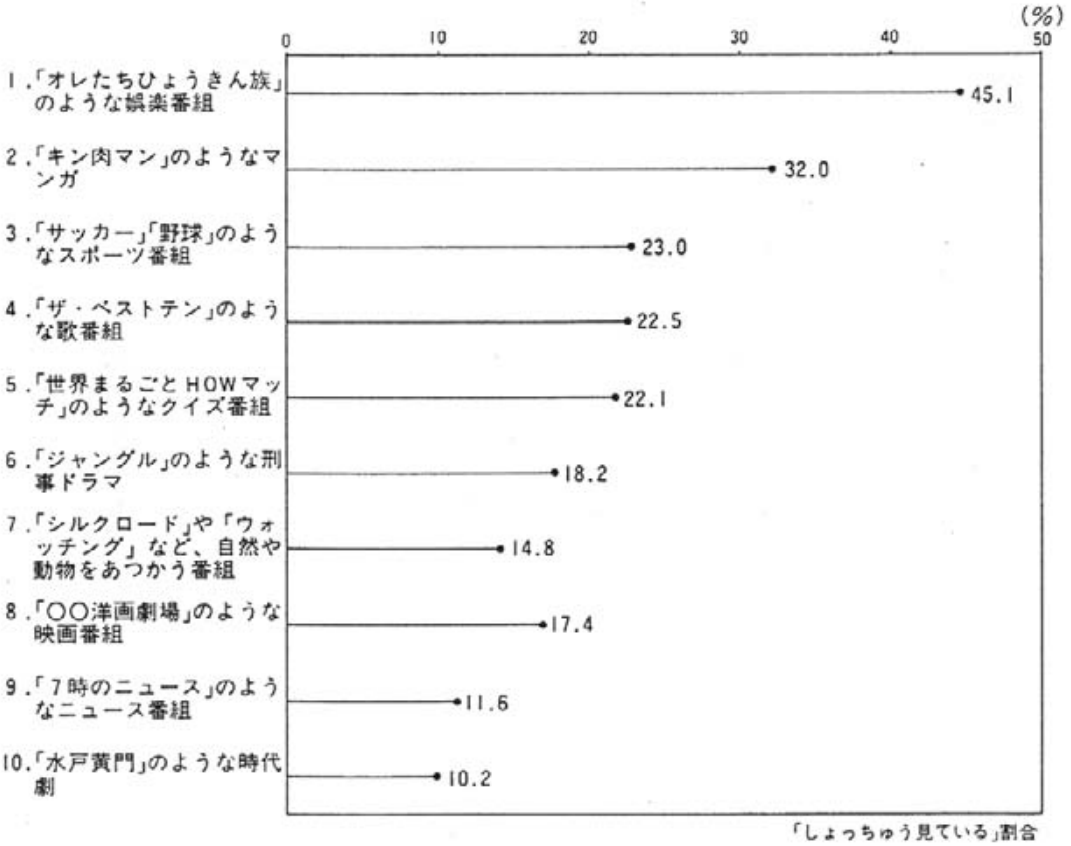


図5　見ている番組×視聴時間

――長時間視聴児はマンガ好き――

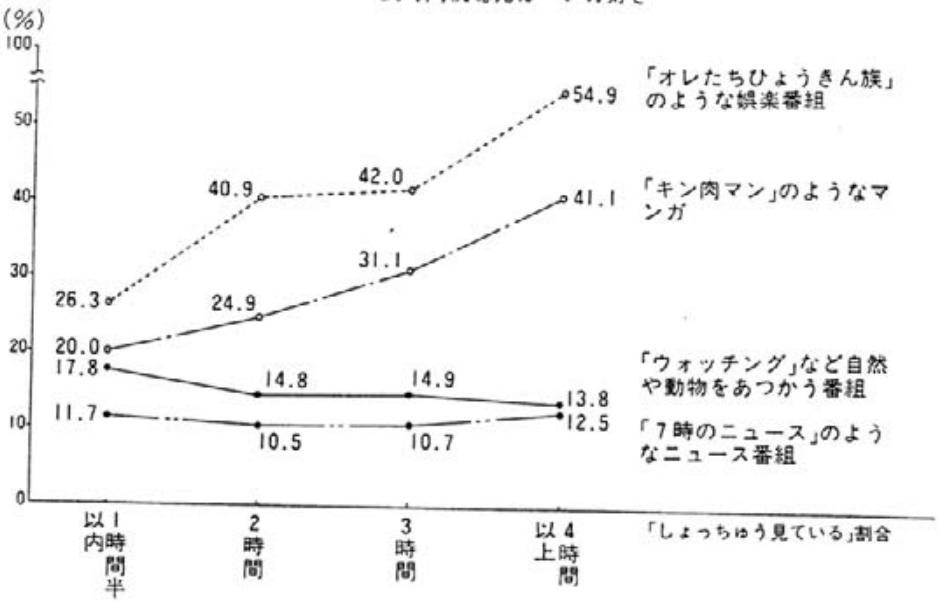


表4　見ている番組×視聴時間

――娯楽番組を見ると視聴時間が長くなる――

(%)

	1時間半以内		2時間		3時間		4時間以上
1.「オレたちひょうきん族」のような娯楽番組	26.3	<	40.9	<	42.0	<	54.9
2.「キン肉マン」のようなマンガ	20.0	<	24.9	<	31.1	<	41.1
3.「サッカー」「野球」のようなスポーツ番組	16.6		23.8		19.5		25.7
4.「ザ・ベストテン」のような歌番組	8.3	<	16.1	<	25.7	<	30.1
5.「世界まるごとHOWマッチ」のようなクイズ番組	15.6		20.2		19.6		26.0
6.「ジャングル」のような刑事ドラマ	8.8	<	14.9	<	19.4	<	22.9
7.「シルクロード」や「ウォッチング」など、自然や動物をあつかう番組	17.8		14.8		14.9		13.8
8.「○○洋画劇場」のような映画番組	9.5	<	11.3	<	17.4	<	23.9
9.「7時のニュース」のようなニュース番組	11.7		10.5		10.7		12.5
10.「水戸黄門」のような時代劇	10.1		8.9		8.5		11.8

「しょっちゅう見ている」割合

レたちひょうきん族」や「キン肉マン」などをいつも見ているのに対し、短時間視聴児はそうした番組を見ないようにしている。

先に短時間視聴の子どもは、テレビをがまんしていると述べた。そしてがまんするというのは、具体的にいえば、見たいマンガや娯楽番組を見ないようにすることなのであろう。

そうした関係を裏書きするかのように図6（表5）によれば、テレビをがまんしている子どもたちは、娯楽番組や歌番組を見ていないのに対し、テレビを十分に見ている子は、当然のことながら、そうした番組を「しょっちゅう見ている」割合が高い。

こうみてくると、テレビ視聴のもつ意味がかなり明らかになってきたように思う。つまり、どれだけ見たい番組を見ないで、少し早めにテレビを見るのをやめるか、あるいは娯楽番組を1本見ないようにするのかが、視聴時間の短さに通じる。テレビとは、がまんをする対象なのであろうか。

図6　娯楽番組を見ているか×テレビをがまんしているか

——よく見ている子は娯楽番組が好き——

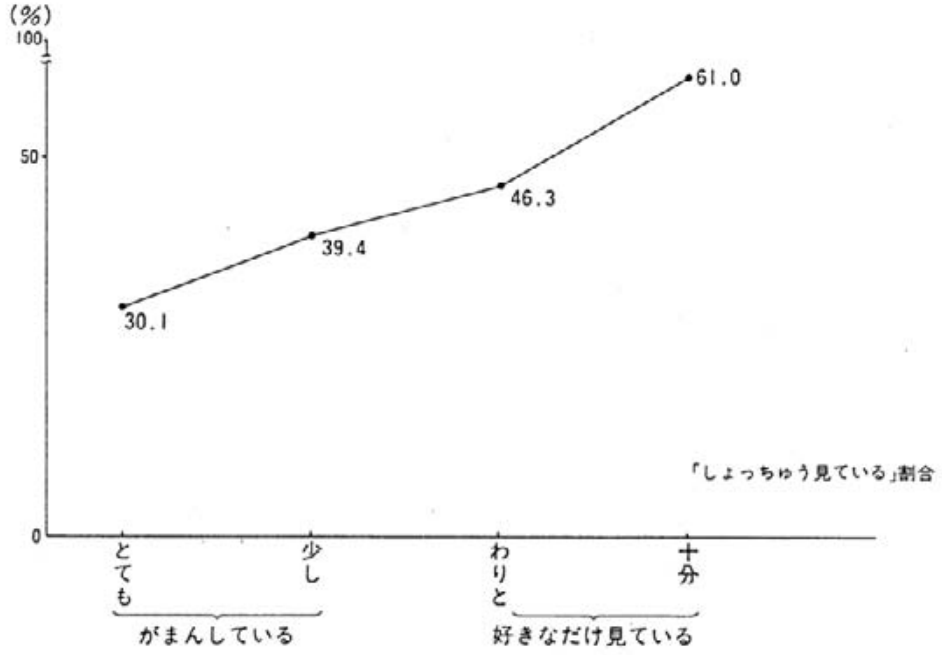


表5　見ている番組×テレビをがまんしているか
――娯楽番組をがまんしている――

(%)

	がまんしている		好きなだけ見ている	
	とても	少し	わりと	十分
1.「オレたちひょうきん族」のような娯楽番組	30.1	39.4	46.3	61.0
2.「キン肉マン」のようなマンガ	38.2	23.3	33.2	52.9
3.「サッカー」「野球」のようなスポーツ番組	27.8	22.9	23.0	23.1
4.「ザ・ベストテン」のような歌番組	8.3	18.4	24.6	30.1
5.「世界まるごとＨＯＷマッチ」のようなクイズ番組	11.1	20.9	22.1	28.3
6.「ジャングル」のような刑事ドラマ	14.3	15.0	17.8	30.2
7.「シルクロード」や「ウォッチング」など、自然や動物をあつかう番組	24.3	14.5	12.9	21.4
8.「○○洋画劇場」のような映画番組	2.8	13.3	17.9	31.0
9.「7時のニュース」のようなニュース番組	8.3	13.4	10.3	11.5
10.「水戸黄門」のような時代劇	20.0	9.0	8.8	17.3

「しょっちゅう見ている」割合

チャンネル権はなくなった

なお、表6に母親のテレビ好きと子どもの見ている番組との関係を示した。母親がテレビを好きだと、子どもがいろいろな番組を見る割合が高まるのは予想通りだが、その関係は予想していたほど強くはなかった。

図7に示したように、現在では一家にテレビが1台という家庭は22%にすぎず、2台の家が43%と標準型の家庭となる。そして「家にテレビが3台以上」という家が35%に達する。

かつてテレビのチャンネル権が、テレビ視聴のポイントになったことがあった。しかし一家に2台、そして3台と、テレビのパーソナル化が進むと、チャンネル権という感じが薄れてくる。

親と子は、それぞれに好きなテレビ番組を見ていればよいのであって、そうした状況のもとでは、チャンネル権の生じる余地すらない。かつてテレビをかこんで、茶の間のだんらんがあった。それでもテレビがなかった時代に比べると、ブラウン管を見つめてしまうあまりに、会話がとぎれがちで、テレビが家族のだんらんを奪うという指摘がなされていた。しかしその場合は、心のうちはともかく、

物理的には家族は居間に顔を揃えていた。

しかしテレビのパーソナル化が進むとそれぞれが、自分の場所で自分のテレビを見ることになるので、家族の解体が一層現実のものとなり始める。

そして表7に示したように、テレビの台数がふえるにつれて、子どもたちがいろいろな番組を見る割合も増加してくる。自分のまわりにテレビがあれば、つい見てしまうのが人情であろう。そうだとすると、テレビを買い与えておいて――あるいは、新しいテレビを買ったので古いテレビを払い下げたかたちであるにせよ――、テレビを見すぎるなというほうが無理というものなのであろう。

表6　見ている番組×母親がテレビ好きか

――予想されるほどの関係はない――

(%)

	とても好き	わりと好き	あまり好きでない	少し嫌いなほう
1.「オレたちひょうきん族」のような娯楽番組	48.4	45.9	44.1	38.5
2.「キン肉マン」のようなマンガ	47.7	31.1	27.0	36.2
3.「サッカー」「野球」のようなスポーツ番組	30.1	22.7	22.2	17.9
4.「ザ・ベストテン」のような歌番組	23.9	21.8	24.2	17.9
5.「世界まるごとHCWマッチ」のようなクイズ番組	33.5 >	21.6 >	20.7 >	13.7
6.「ジャングル」のような刑事ドラマ	24.5	16.9	18.2	18.3
7.「シルクロード」や「ウォッチング」など、自然や動物をあつかう番組	20.1	13.9	14.9	13.4
8.「○○洋画劇場」のような映画番組	22.8	15.7	15.7	27.4
9.「7時のニュース」のようなニュース番組	19.1	11.4	7.4	18.1
10.「水戸黄門」のような時代劇	11.3	10.9	8.9	6.5

「しょっちゅう見ている」割合

図7　テレビの台数

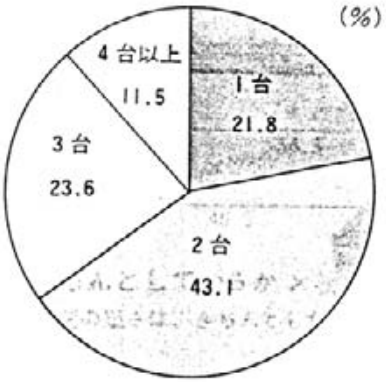


表7　見ている番組×テレビの台数

——台数が多いといろいろな番組を見る——

(%)

	1台	2台	3台	4台以上
1.「オレたちひょうきん族」のような娯楽番組	35.9	47.3	49.5	45.2
2.「キン肉マン」のようなマンガ	33.1	31.2	33.4	31.2
3.「サッカー」「野球」のようなスポーツ番組	20.2	23.9	21.6	28.8
4.「ザ・ベストテン」のような歌番組	16.6	23.8	23.6	26.9
5.「世界まるごとHOWマッチ」のようなクイズ番組	19.3 <	20.2 <	25.0 <	28.5
6.「ジャングル」のような刑事ドラマ	16.6	18.7	17.1	21.0
7.「シルクロード」や「ウォッチング」など、自然や動物をあつかう番組	15.9	12.6	16.8	17.2
8.「○○洋画劇場」のような映画番組	15.1	17.2	17.0	23.7
9.「7時のニュース」のようなニュース番組	10.1	13.4	9.8	11.5
10.「水戸黄門」のような時代劇	10.2	9.6	9.0	14.2

「しょっちゅう見ている」割合

2. テレビ視聴と自己像

生活がきちんとしているか

テレビは身近にあって、しかも魅力にとむ。それだけに子どもでなくとも、ついテレビとつき合う時間が長びいてしまう。そして、見すぎてしまい、なんとなく時間を浪費したような後悔の念が残る。

それだけに、テレビを見ている子どもたちは、テレビを見ない子と比べ、自己像に歪みを抱いているのではないのか。換言するならテレビを見ていない子は、がまんのできる自分に誇りをもっている可能性が強い。

そう考えて、生活がきちんとしているかと視聴時間との関連を調べてみた。図8（表8）から明らかなように、自分を「生活がきちんとしている」と「とてもそう」思っている子の36％は視聴時間が短いのに対し、「あまりきちんとしていない」子の中で、4時間以上テレビを見ている子が32％を占める。

クロス集計は当然のことながら、A×BとB×Aとの組み合わせがあるので、表8とは反対に視聴時間をキイとして、生活がきちんとしているかをクロス集計してみたが、テレビを4時間以上見ている子どもたちの48％、つまりほぼ半数の子は、自分の生活がきちんとしていないことを認めている（表9）。

図8　生活がきちんとしているか×視聴時間

――生活がきちんとしていないと思っている子は視聴時間が長い――

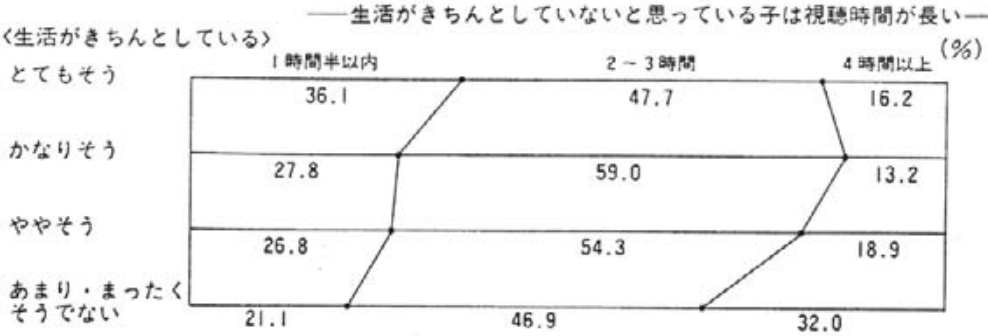


表8　生活がきちんとしているか×視聴時間

――視聴時間の短さは、きちんとした生活をあらわす――

(%)

		30分以内	1時間	1時間半	2時間	2時間半	3時間	4時間	5時間以上
生活がきちんとしている	とてもそう	3.5	12.8	19.8	10.5	16.3	20.9	8.1	8.1
		36.1						16.2	
	かなりそう	3.6	10.8	13.4	19.1	18.0	21.9	8.6	4.6
		27.8						13.2	
	ややそう	2.8	11.6	12.4	18.2	17.1	19.0	13.5	5.4
		26.8						18.9	
	あまり・まったくそうでない	6.1	3.4	11.6	12.9	17.0	17.0	18.4	13.6
		21.1						32.0	

表9　視聴時間×生活がきちんとしているか

――4時間以上の半数はきちんとしていないと思う――

(%)

	生活がきちんとしている				
	とてもそう	かなりそう	ややそう	あまりそうでない	まったくそうでない
1時間半以内	8.0	15.9	43.7	24.4	8.0
	23.9			32.4	
2時間	6.3	15.1	39.1	30.8	8.7
	21.4			39.5	
3時間	6.2	15.5	40.2	27.0	11.1
	21.7			38.1	
4時間以上	5.5	11.7	34.8	35.4	12.6
	17.2			48.0	

学業成績との関係

テレビのスイッチを消して、勉強が始められる。そうであるから、生活がきちんとしていると思うのも当然であろうが、テレビ視聴が自己評価のその他の面にも影響を及ぼすかどうかをたずねてみた。

表10にその結果を要約したが、表中の左上の「57.4%」を例にとると、これは視聴時間が1時間半以内の子どもの中で、友だちが「とても」「かなり」多いと思っている子が57.4%を占めることを意味している。

「友だちが多い」については、視聴時間が「1時間半以内」が57.4%、「2時間台」57.1%、「3時間台」58.3%、「4時間以上」57.4%と、ほとんど差が認められない。つまりテレビを視聴する時間と友だちの多さとの関連は乏しい。換言するなら、テレビを見る時間が長い、あるいは短いからといって、友だちの数が多いことはないというのである。

この表の中で、友だちの数と並んで「友だちにやさしく親切」は、テレビ視聴と関係が

表10　自己評価×視聴時間

——勉強の得意さにひらき——

(%)

		1時間半以内		2時間		3時間		4時間以上
友だちが多い	とてもそう	31.8		32.9		33.3		33.4
	かなりそう	25.6		24.2		25.0		24.0
	小　計	57.4	＝	57.1	＝	58.3	＝	57.4
がんばりぬく力がある	とてもそう	11.4		7.0		5.3		7.4
	かなりそう	15.3		13.5		14.5		11.2
	小　計	26.7	＞	20.5	＝	19.8	＝	18.6
友だちにやさしく親切	とてもそう	9.1		4.8		6.2		6.6
	かなりそう	14.3		17.6		13.7		13.6
	小　計	23.4	＝	22.4	＝	19.9	＝	20.2
生活がきちんとしている	とてもそう	8.0		6.3		6.2		5.5
	かなりそう	15.9		15.1		15.5		11.7
	小　計	23.9	＝	21.4	＝	21.7	＞	17.2
先生から信頼されている	とてもそう	4.6		5.1		3.5		3.1
	かなりそう	6.9		6.1		4.8		5.1
	小　計	11.5	＝	11.2	＞	8.3	＝	8.2
勉強が得意	とてもそう	6.8		3.6		3.5		2.6
	かなりそう	14.2		8.9		4.9		4.7
	小　計	21.0	＞	12.5	＞	8.4	＞	7.3

薄いが、「がんばりぬく力」や「先生からの信頼」については、視聴時間の短い子のほうに、そうした面で自信をもつタイプが多い。さらに、勉強の成績と視聴時間との間には強い関連が認められるので、それをあらためて、まとめてみると図9（表11）のような結果となる。

勉強をするのには、かなりの時間を必要とする。そうであるから、勉強をする子は見たいテレビをがまんせざるをえない。そのため

図9　勉強の得意さ×視聴時間

――勉強の得意な子は、テレビをあまり見ない――

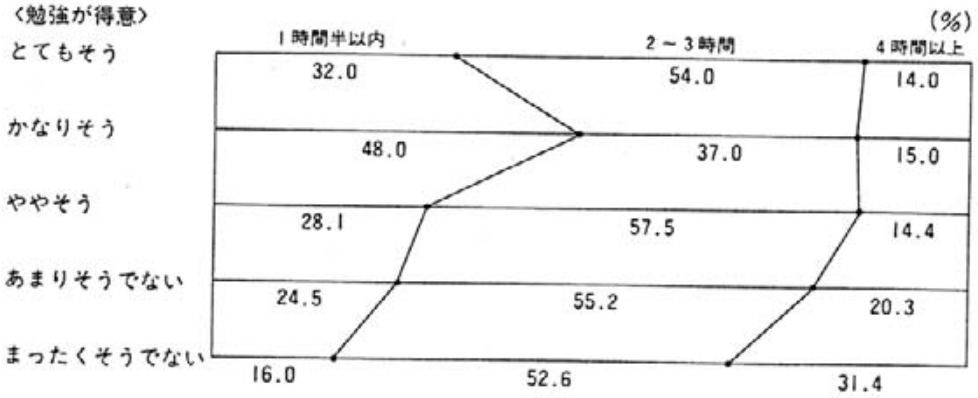


表11　勉強の得意さ×視聴時間

――苦手な子は、テレビにおぼれがち――

(%)

		30分以内	1時間	1時間半	2時間	2時間半	3時間	4時間	5時間以上
勉強が得意	とてもそう	6.0	18.0	8.0	22.0	16.0	16.0	6.0	8.0
		32.0						14.0	
	かなりそう	8.0	17.0	23.0	14.0	11.0	12.0	11.0	4.0
		48.0						15.0	
	ややそう	3.6	9.9	14.6	18.5	20.8	18.2	9.7	4.7
		28.1						14.4	
	あまりそうでない	2.0	9.8	12.7	16.8	15.9	22.5	14.9	5.4
		24.5						20.3	
	まったくそうでない	2.4	4.4	9.2	14.7	13.0	24.9	18.8	12.6
		16.0						31.4	

勉強の得意な子たちは、テレビの視聴時間が短いという結果が生じてくる。

見たいテレビをがまんする態度は、自分をコントロールできる。つまり自己抑制力を意味する。したがって自己抑制力をもつ子は、自分に自信を抱くのは、当然なのかもしれない。

達成意欲に関連して

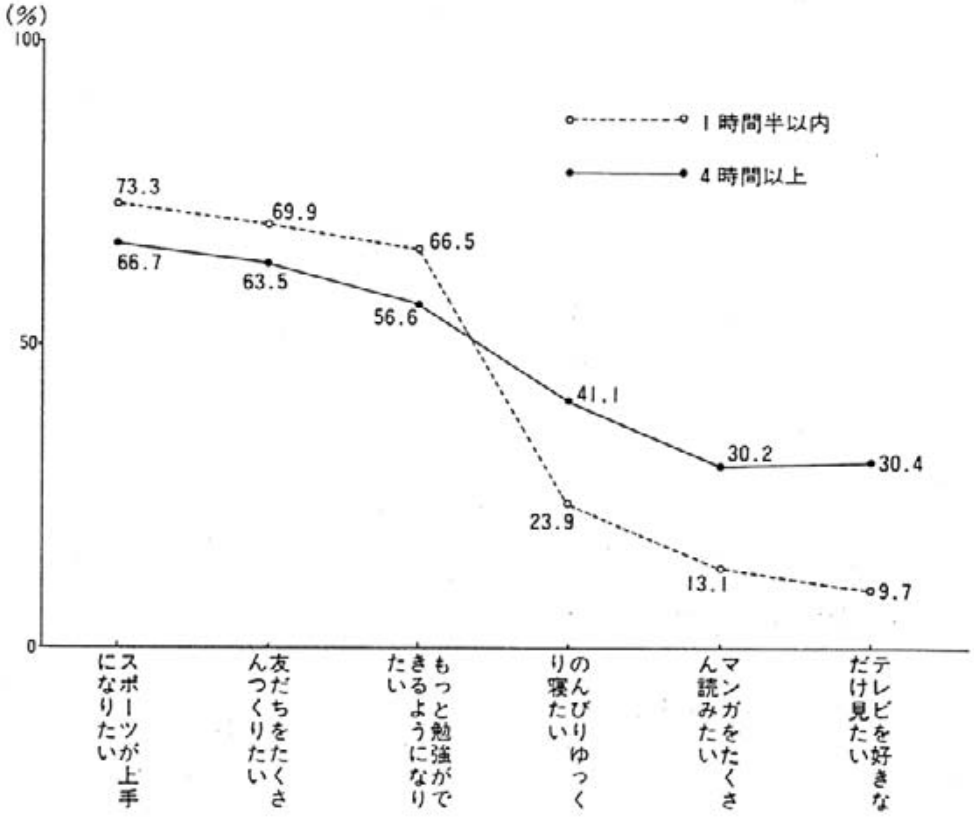
テレビ視聴と自己評価との関連は、この他図10（表12）のような面にも認めることができる。

これは子どもたちが、未来に対して強い達成意欲をもっているか、それとも無気力なのかをたしかめたものだが、図から明らかなように、テレビをがまんしている子は未来に意欲を燃やしているが、テレビを見ている子は「のんびり寝たい」「マンガをたくさん読みたい」など、意欲に欠けた生活を送ろうとしている。

もちろんこれは、どちらが原因で、どちらが結果かと決められるほど簡単なものではなく、むしろ無気力な生活態度が、視聴時間の長さとなってあらわれるとみなしたほうが適切であろう。

図10　自己評価×視聴時間

――テレビ派はのんびり寝たい――



しかしいずれにせよ、図11に示したように、中学生になったら、どのような生活を送りたいかについても、視聴時間の短い子は「うんと勉強したい」と思っているのに対し、視聴時間の長い子は「ウォークマンをききたい」「歌手のコンサートへ行きたい」と思っている。

表12　自己評価×視聴時間

——ゆっくり寝たい・マンガを読みたい子はテレビに通じる——

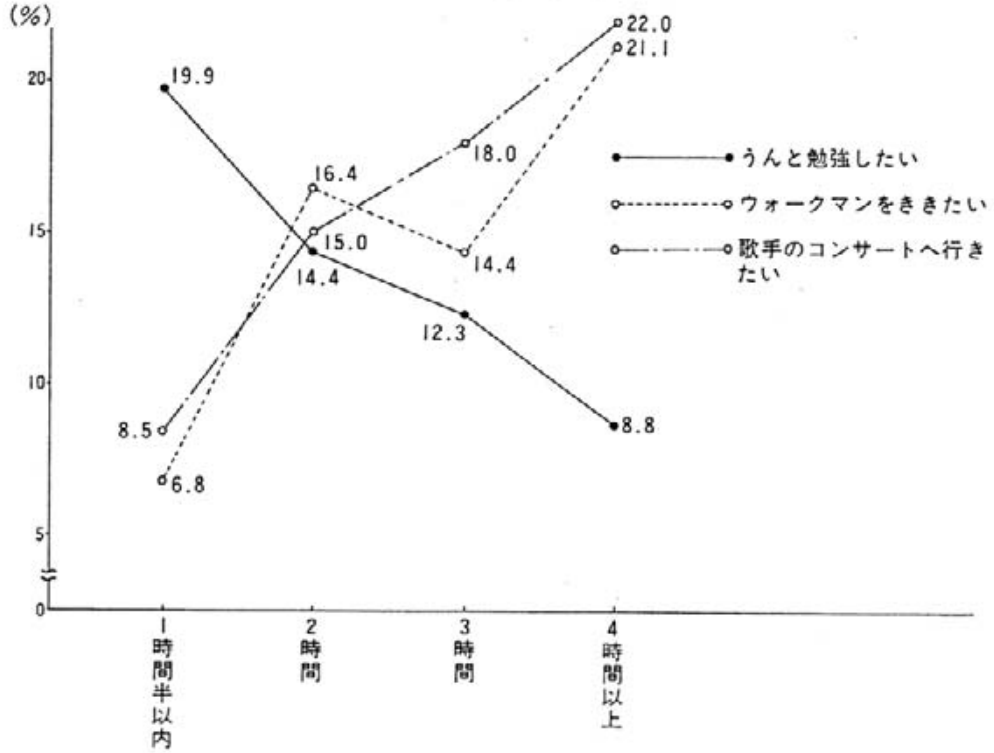
(%)

	1時間半以内		2時間		3時間		4時間以上
1.スポーツが上手になりたい	(73.3)	>	67.7	>	64.6		66.7
2.友だちをたくさんつくりたい	(69.9)	>	65.1	>	59.6		63.5
3.もっと勉強ができるようになりたい	(66.5)	>	58.0	>	55.9		56.6
4.のんびりゆっくり寝たい	23.9	<	26.5	<	29.3	<	(41.1)
5.マンガをたくさん読みたい	13.1	<	20.3	<	22.7	<	(30.2)
6.テレビを好きなだけ見たい	9.7	<	14.3	<	16.2	<	(30.4)

「ぜひそうなりたい」割合　◯は最大値

図11　中学生になったらどうしたいか×視聴時間

——視聴時間の長い子は音楽をききたい——



進路との関わり

さらに図12によれば、視聴時間の長さは、将来の進路予想にも関連している。これまでの分析から考えられるように、視聴時間の短い子の中でむずかしい大学への進学を望んでいる子が多い。

こうみてくると、テレビの視聴時間の長短は、子どもたちの生き方そのものをうつしだしているように思える。つまり視聴時間の短い子は、自己抑制力をもっていると思えるので、こうした生活をつみ重ねていけば、将来も見通しが明るいと、意欲にみちた態度で毎日を過ごしている。それに対し、視聴時間が長くなるにつれて、がまんができない自分にふがいのなさを感じ、こんな生活では将来も閉ざされていると思って、目的をもたずに無気力な生活を送っている。

さらにいえば、図13（表13）のように視聴時間の長い子の中に「すぐあくびがでる」や「疲れやすい」「食欲がない」などの体調の悪さを訴える子が目につく。毎日のように、長い時間テレビを見ていると、体調も悪くなるだろうと思う反面、こうしたデータを手にすると、テレビの視聴時間の問題は、テレビという範囲を超えて、子どもの成長そのものに関連をもっていると考えざるをえない。

図12　将来の進路×視聴時間

――視聴時間の長い子はつとめ派――

(%)

	つとめる	短大か専門学校	ふつうの大学	むずかしい大学
1時間半以内	20.9	20.9	35.5	22.7
2時間	29.8	18.4	31.7	20.1
3時間	35.8	16.7	31.2	16.3
4時間以上	43.4	14.9	28.1	13.6

図13　体調×視聴時間

――テレビを見ていると、朝、起きられない――

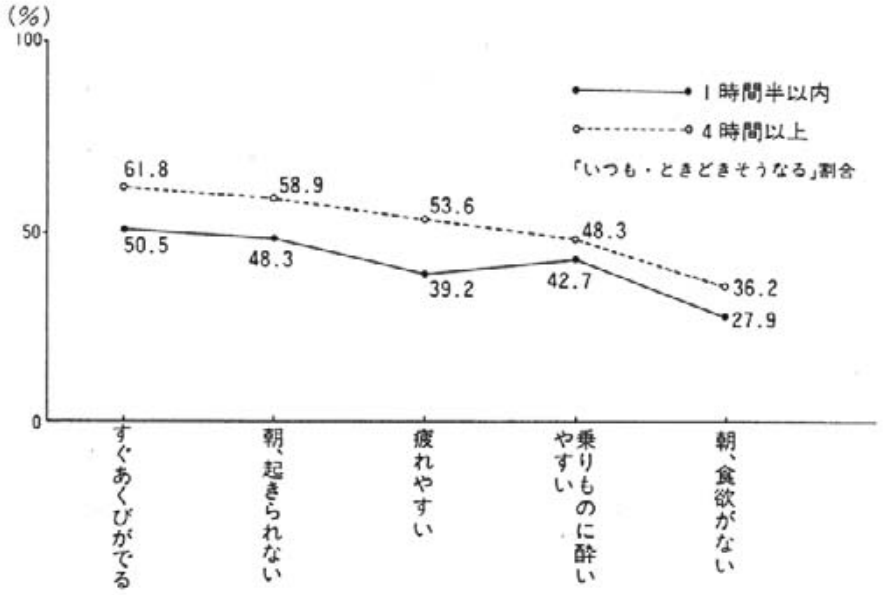


表13　体調×視聴時間

――視聴時間の長さは体調の悪さにつながる――

(%)

		1時間半以内		2時間		3時間		4時間以上
乗りものに酔いやすい	いつもそうなる	18.8		18.0		15.0		16.4
	ときどきそうなる	23.9		26.9		31.7		31.9
	小計	42.7	<	44.9	<	46.7	<	(48.3)
朝、起きられない	いつもそうなる	14.8		14.9		19.8		22.3
	ときどきそうなる	33.5		32.0		30.8		36.6
	小計	48.3		46.9	<	50.6	<	(58.9)
すぐあくびがでる	いつもそうなる	15.3		13.0		14.1		24.0
	ときどきそうなる	35.2		41.0		38.8		37.8
	小計	50.5		54.0		52.9	<	(61.8)
疲れやすい	いつもそうなる	9.7		11.6		7.5		12.4
	ときどきそうなる	29.5		34.2		42.3		41.2
	小計	39.2	<	45.8	<	49.8	<	(53.6)
朝、食欲がない	いつもそうなる	6.3		6.1		6.6		11.0
	ときどきそうなる	21.6		24.6		24.2		25.2
	小計	27.9	<	30.7		30.8	<	(36.2)

◯は最大値

3. 視聴態度をかたちづくるために

テレビへのコミット

このように、テレビ視聴は子どもの発達に密接に関連しているので、テレビ視聴をどうしたらよいか、特に視聴時間の長い子の視聴時間をいかに短くするのかが大事になる。しかしそうした検討は、もう少しのちにゆずり、その前にテレビについての評価を加えておきたい。

図14は、子どもたちが、テレビにどの程度コミット（心をよせている）しているのかをたずねたものだが、全体としてみると、「テレビに１度は出てみたい」と思っている子は25%にすぎないし、「テレビでつかっている言葉を自分もつかおう」と考えている子も18%にとどまっているなど、コミットの仕方が消極的なのが目につく。

自分からテレビにコミットするというより、テレビをクールに見つめている。あるいは、テレビは暇つぶしや気晴らしの対象であって、楽しむためにテレビを見ることはあっても、それ以上には、テレビに心をよせないというのであろう。

そうしたなかで、表14によれば視聴時間の長い子どもたちはテレビにコミットしている割合が多い。コマーシャルを見るとその品物が買いたくなるし、自分もテレビに出てみたいという。それに対し視聴時間の短い子は、テレビを通じて、情報をえている感じで「いつもどこかで事件が起こっている」「かわいそうな番組を見て、人には親切にしよう」などと思っている。

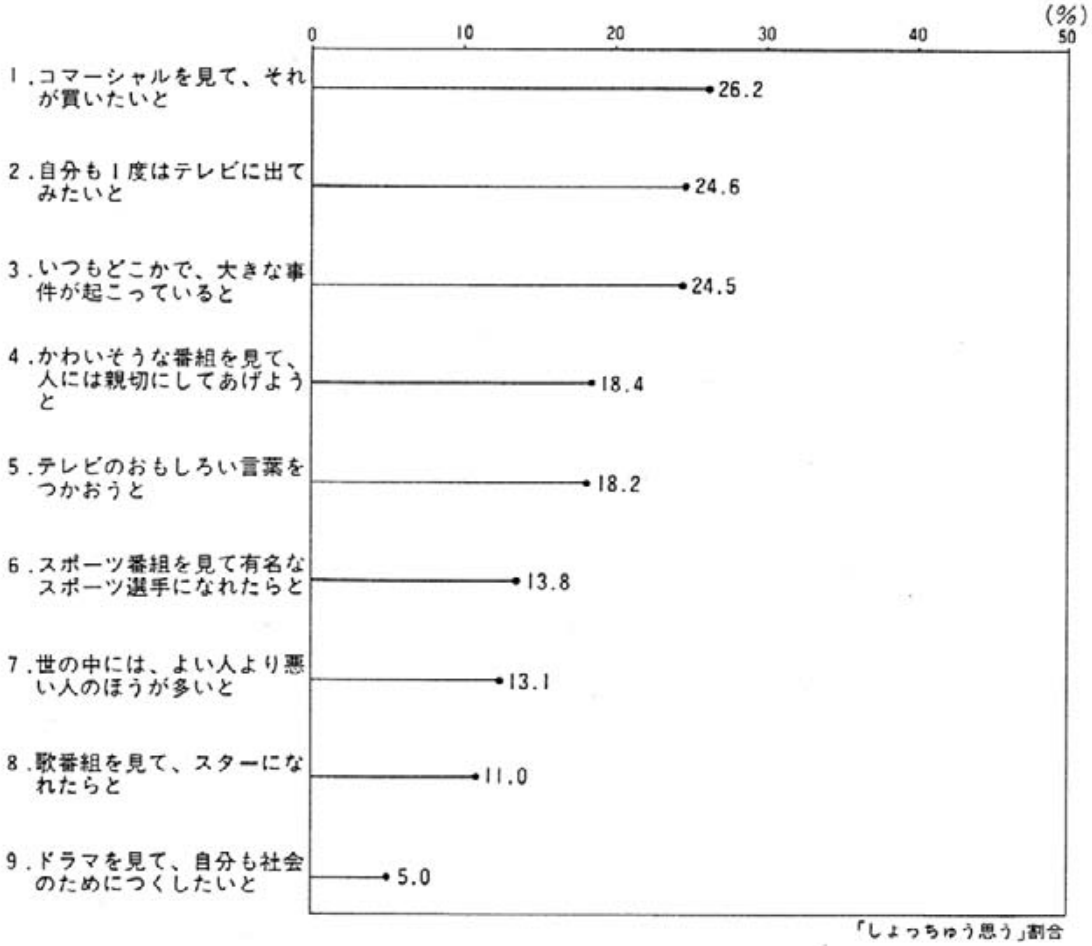
長時間視聴児の場合、テレビに長い時間関わっているから、テレビに関心をよせている割合が多いのも、当然のように思える。なお、テレビへのコミットと勉強の得意さとの

関連は、表15の通りで、勉強の得意なタイプは、テレビを通して情報をえたり、動機づけをえたりしている。

このように子どもたちは、テレビにあまりコミットすることなしに、テレビをいわば気晴らしの対象として見つめている。それならば、子どもにとってテレビはどんな意味をもっているのか。

図14　テレビへのコミット

――予想しているよりはクールに――



「しょっちゅう思う」割合

表14　テレビへのコミット

――視聴時間の短いタイプはまじめ派――

(%)

	1時間半以内	2時間	3時間	4時間以上
1.いつもどこかで、大きな事件が起こっていると	28.7	21.2	25.2	25.1
2.自分も1度はテレビに出てみたいと	22.6	22.8	23.8	26.8
3.コマーシャルを見て、それが買いたいと	18.3	21.4	20.2	34.4
4.かわいそうな番組を見て、人には親切にしてあげようと	22.3	19.0	21.4	15.3
5.テレビのおもしろい言葉をつかおうと	14.9	13.9	16.7	23.0
6.スポーツ番組を見て、有名なスポーツ選手になれたらと	14.1	14.7	12.3	13.6
7.世の中には、よい人より悪い人のほうが多いと	13.2	11.4	11.1	15.0
8.歌番組を見て、スターになれたらと	5.7	11.6	11.0	12.3
9.ドラマを見て、自分も社会のためにつくしたいと	8.5	4.8	4.8	3.8

「しょっちゅう思う」割合　◯は最大値

表15　テレビへのコミット×勉強が得意か

――勉強の得意なタイプは、テレビにもコミット――

(%)

	勉強が得意か				
	とてもそう	かなりそう	ややそう	あまりそうでない	まったくそうでない
1.いつもどこかで、大きな事件が起こっていると	42.0	31.6	28.9	17.9	26.6
2.自分も1度はテレビに出てみたいと	32.0	32.0	26.2	21.3	25.0
3.コマーシャルを見て、それが買いたいと	26.0	31.3	26.0	20.7	36.0
4.かわいそうな番組を見て、人には親切にしてあげようと	36.7	37.4	19.9	15.1	13.7
5.テレビのおもしろい言葉をつかおうと	30.0	21.2	16.8	14.9	23.4
6.スポーツ番組を見て、有名なスポーツ選手になれたらと	23.5	21.0	16.3	10.1	14.0
7.世の中には、よい人より悪い人のほうが多いと	28.0	19.2	12.2	7.8	20.1
8.歌番組を見て、スターになれたらと	9.8	11.2	11.1	11.3	10.0
9.ドラマを見て、自分も社会のためにつくしたいと	17.6	9.1	6.6	2.9	3.8

「しょっちゅう思う」割合

テレビの効用

図15に示したように、子どもたちはテレビの効用をかなり好意的に評価している。「テレビを通して、広い世界のことを知ることができる」と思っている子は、「とてもそう思う」の26%に「わりと」の38%を含めると64%に達する。また「テレビは世の中の出来事を早く知らせてくれるので、役に立つ」についても「とてもそう思う」の25%に「わりと」の40%を含めた65%がそう思っている。

したがって「テレビはなくなったほうがよい」と思っている子は「とてもそう思う」の1%に「わりと」の2%を加えても3%にとどまっている。しかもテレビについてのそうしたコンセプトは、表16に示したように視聴時間のタイプを超えて、かなり共通している。テレビは役に立つし、それにおもしろいという気持ちは、どの子にも共有されている。それだけ、テレビが子どもの世界に浸透している証拠なのであろう。

図15　テレビへの評価

――おもしろいし、楽しい――

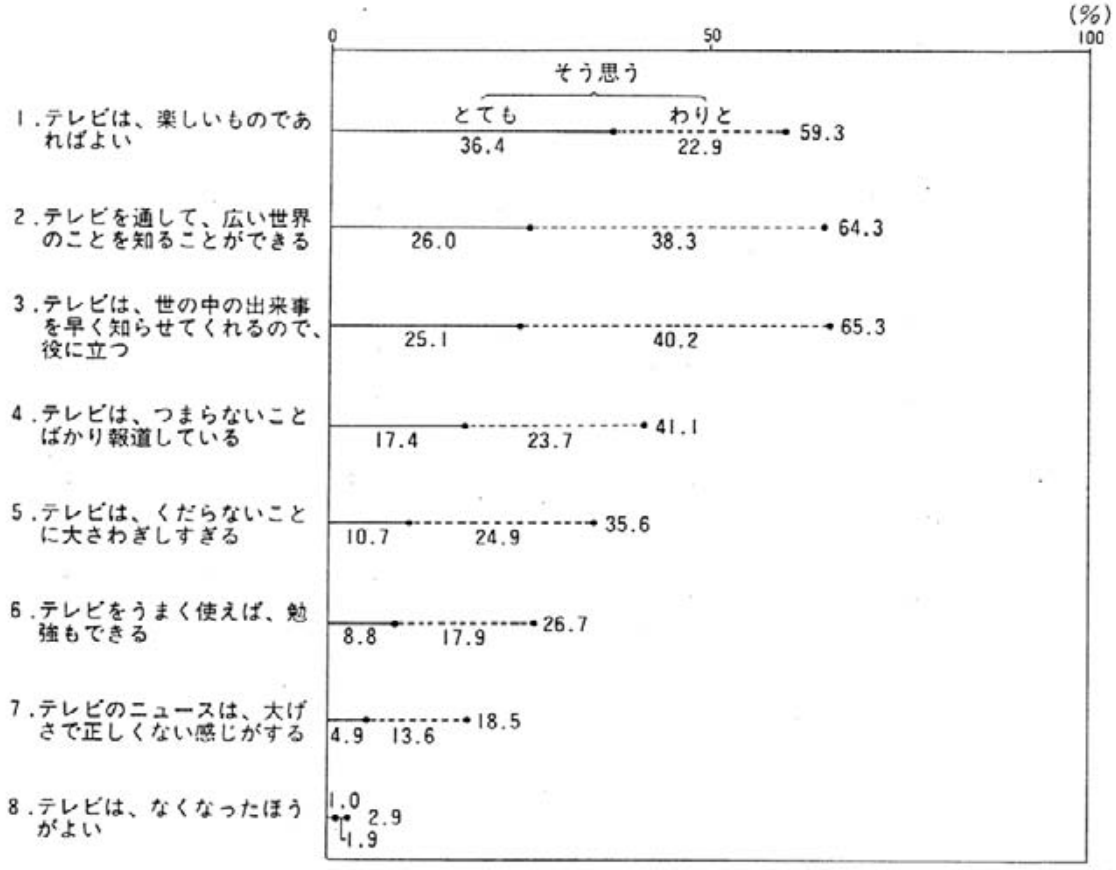


表16　テレビへの評価×視聴時間

——コンセプトはあまり変わりはない——

(%)

		1時間半以内	2時間	3時間	4時間以上
1.テレビは、楽しいものであればよい	とてもそう思う	21.1	27.2	35.1	47.9
	わりとそう思う	24.6	26.0	23.7	20.0
	小計	45.7	53.2	58.8	67.9
2.テレビを通して、広い世界のことを知ることができる	とてもそう思う	27.3	26.6	23.9	25.8
	わりとそう思う	40.9	38.3	41.2	36.5
	小計	68.2	64.9	65.1	62.3
3.テレビは、世の中の出来事を早く知らせてくれるので、役に立つ	とてもそう思う	27.7	23.5	24.2	25.6
	わりとそう思う	40.1	40.5	42.7	39.4
	小計	67.8	64.0	66.9	65.0
4.テレビは、つまらないことばかり報道している	とてもそう思う	19.8	16.0	17.9	17.6
	わりとそう思う	24.9	24.9	23.1	22.8
	小計	44.7	40.9	41.0	40.4
5.テレビは、くだらないことに大さわぎしすぎる	とてもそう思う	15.3	11.0	7.9	10.4
	わりとそう思う	11.0	26.1	28.1	23.8
	小計	26.3	37.1	36.0	34.2
6.テレビをうまく使えば、勉強もできる	とてもそう思う	11.9	8.5	7.5	8.7
	わりとそう思う	12.5	22.3	18.6	16.0
	小計	24.4	30.8	26.1	24.7
7.テレビのニュースは、大げさで正しくない感じがする	とてもそう思う	4.5	5.5	4.0	4.9
	わりとそう思う	9.1	12.8	13.4	15.7
	小計	13.6	18.3	17.4	20.6
8.テレビは、なくなったほうがよい	とてもそう思う	1.7	0.7	0	1.4
	わりとそう思う	4.0	2.2	0.9	1.4
	小計	5.7	2.9	0.9	2.8

テレビ台数との関係

テレビは役に立つし、おもしろいと思っているから、つい視聴時間が長びく。そして、そうした視聴時間の長さが、自己像の形成に深く関わりをもつのは、すでにふれた通りである。

それだけに、テレビにおぼれないようにするのにはどうしたらよいかが大事になるが、まず図16（表17）に目をとめてほしい。

これは、テレビの台数と視聴時間との関係を調べたものだが、台数がふえるにつれて、子どもたちの視聴時間が長びいている。

身近にあれば、テレビのスイッチをいれてしまうのが人情であろう。したがって、テレビの台数がふえると、視聴時間が長びくというのは当然の結果といえなくもない。

そう考えると子どもたちの視聴時間を短くするのに、テレビの台数を少なくすることが必要のように思われてくる。

図16　テレビの台数×視聴時間

――4台以上だと4時間以上が3割――

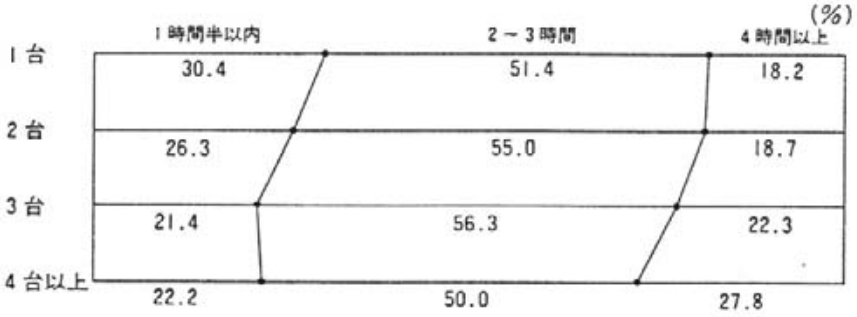


表17　視聴時間×テレビの台数

――テレビが身近にあれば見てしまう――

(%)

	30分以内	1時間	1時間半	2時間	2時間半	3時間	4時間	5時間以上
1台	6.3	12.5	11.6	16.2	14.2	21.0	11.6	6.6
	18.8						18.2	
2台	2.2	10.3	13.8	17.8	17.3	19.9	13.1	5.6
	12.5						18.7	
3台	1.2	6.3	13.9	17.5	16.6	22.2	14.8	7.5
	7.5						22.3	
4台以上	4.3	8.0	9.9	13.0	16.0	21.0	18.5	9.3
	12.3						27.8	

テレビ環境の影響

そうしたテレビの台数をもう少しこまかく検討するために、テレビ環境とでもいうべきものを考えてみた。

テレビ環境とは、本人がテレビを見るための環境といえばよいのであろうか、具体的には**表18**（図17）のような条件が問題になる。勉強するところやベッドから、テレビの音が聞こえる。日本の住宅事情を考えると、それもしかたがないと思うが、そうしたかたちでテレビが身のまわりにあると、子どもの視聴時間が長びくのは図の示す通りである。

テレビの音が聞こえている、ましてそれがおもしろそうならば、テレビを見てしまうのが当然で、図17からテレビ視聴がそうしたテレビ環境と密接に関連していることがわかる。

そして**表19**によれば、母親がテレビを好きだと、子どももテレビ好きになるという。これも一種のテレビ環境なのであろうが、母親がテレビ好きなら、テレビのついている時間が長くなり、子どももテレビを見続けることになるのであろう。

そうだとすると、①家の中に何台かのテレビがあり②家族、特に母親がテレビ好きで③テレビがいつもついているなら、その子のテレビ視聴時間が長くなり、テレビ好きの子になるのは、否定しにくいように考えられる。

そう考えてくると、長い時間テレビを見ている子どもたちは、いわばそうした環境の犠牲者、あるいは被害者という感じがしてくる。

そしてそうした視聴時間の長さが、単にテレビの問題だけでなく、人間形成全体に影響を及ぼしていたのは、すでに指摘した通りである。

表20のようなテレビとのつき合い方と学業成績との関連も一例だが、スペースの関係で省略したが、この他にもさまざまな項目との

表18　テレビ環境×視聴時間

——視聴時間の長さは環境の影響を受ける——

（%）

		1時間半以内	2時間	3時間	4時間以上
テレビ	1.食事をするテーブルから よく見える	46.5	< 54.6	< 58.8	< (65.0)
	1.食事をするテーブルから 音がよく聞こえる	55.9	< 58.9	< 62.7	< (68.8)
	2.あなたの寝床から（ベッドや布団） よく見える	20.9	20.1	< 28.4	< (37.7)
	2.あなたの寝床から（ベッドや布団） 音がよく聞こえる	21.4	< 23.6	< 29.7	< (39.3)
	3.あなたの勉強する机から よく見える	12.6	< 15.4	< 24.8	< (26.4)
	3.あなたの勉強する机から 音がよく聞こえる	18.3	< 20.6	< 31.1	< (37.0)

◯は最大値

図17　テレビ環境×視聴時間

――4時間以上の子は、テレビにかこまれて暮らしている――

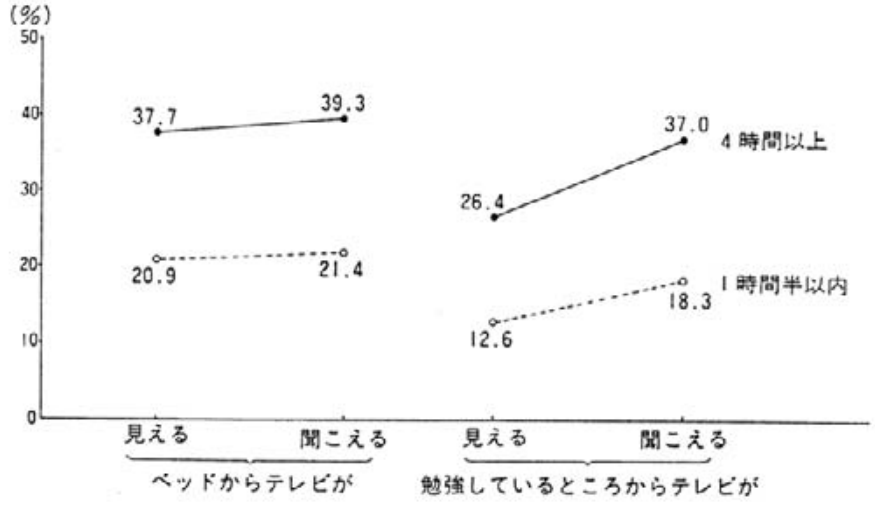


表19　母親がテレビ好きか×視聴時間

――テレビ好きの母親からテレビ好きの子――

(%)

	30分以内	1時間	1時間半	2時間	2時間半	3時間	4時間	5時間以上
とても好き	3.1	6.9	8.8	16.9	16.3	18.6	16.9	12.5
	18.8						29.4	
わりと好き	2.3	9.6	12.0	16.4	17.2	22.5	14.2	5.8
	23.9						20.0	
あまり好きでない	4.4	10.2	15.3	18.0	15.0	19.2	12.1	5.8
	29.9						17.9	
少し嫌いなほう	3.0	11.1	17.2	14.1	14.1	19.3	13.1	8.1
	31.3						21.2	

クロス集計結果で思わぬ関連が見いだされたことを付記しておきたい。

そのひとつを示すと、図18（表21）である。テレビをがまんしている子の4割以上はマンガを読まないのに対し、長時間視聴児の中にマンガ好きが目につく。換言するなら、テレビ好きの子はテレビだけでなく、マンガも読む割合が高い。

身近にあって、ともかく楽しめ、くつろいだ時を過ごせる。考えてみるとテレビとマンガとは共通性を備えているのであろう。そしてラジオやラジカセ、テレビゲームなど、子どもたちのまわりに、そうした暇つぶし型の余暇の対象がみちあふれており、そうした意味ではテレビとのつき合い方は、テレビに限らず暇つぶし型余暇との関わりを考えるときのモデルとしての意味をもつのであろう。

表20　見ている番組×勉強が得意か

——勉強の得意な子はクイズ番組が好き——

(%)

	勉強が得意				
	とてもそう	かなりそう	ややそう	あまりそうでない	まったくそうでない
1.「オレたちひょうきん族」のような娯楽番組	32.0	43.4	44.0	44.1	(51.6)
2.「キン肉マン」のようなマンガ	31.3	27.6	31.9	28.7	(41.0)
3.「サッカー」「野球」のようなスポーツ番組	(34.0)	29.9	24.9	18.5	26.0
4.「ザ・ベストテン」のような歌番組	12.2	19.6	23.2	(23.7)	22.0
5.「世界まるごとＨＯＷマッチ」のようなクイズ番組	(36.0)	33.3	22.6	19.1	21.5
6.「ジャングル」のような刑事ドラマ	18.0	14.1	17.8	18.0	(20.0)
7.「シルクロード」や「ウォッチング」など、自然や動物をあつかう番組	(26.5)	21.2	14.7	12.7	15.4
8.「○○洋画劇場」のような映画番組	(24.5)	17.5	17.1	14.7	21.8
9.「7時のニュース」のようなニュース番組	(30.0)	19.4	11.4	9.7	9.8
10.「水戸黄門」のような時代劇	(14.9)	11.3	10.6	8.3	12.1

「しょっちゅう見ている」割合　◯は最大値

図18　マンガを読むか×視聴時間

――テレビだけでなく、マンガもがまんの対象――

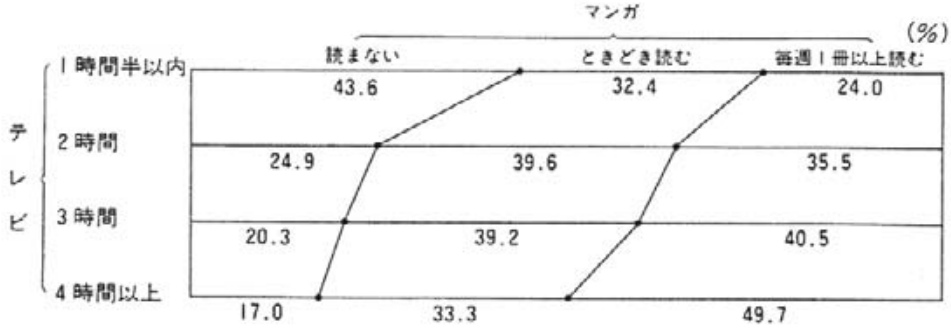


表21　マンガを読むか×視聴時間

――テレビを見る子はマンガも読む――

(%)

	ほとんど読まない	ときどき読む	だいたい毎週1冊くらい	毎週2冊くらい	もっと読んでいる
1時間半以内	43.6	32.4	16.5	5.7	1.8
2時間	24.9	39.6	19.9	9.8	5.8
3時間	20.3	39.2	22.0	9.7	8.8
4時間以上	17.0	33.3	25.8	8.8	15.1

テレビを見るきまり

そう考えると、テレビのしつけのもつ大事さがわかってくるが、それについて図19（表22）のような結果がえられている。この結果から視聴時間の短い子どもたちが、それなりのルールをもってテレビを見ているのがわかる。それに対し視聴時間の長い子は、いわば野放しの状態でテレビを見つめている。したがって、テレビの視聴時間の長さに問題が多いとしたら、この図表のように、テレビを見るためのルールを作ることが必要であろう。

1．勉強をしながらテレビを見ない
2．夜遅くまでテレビを見ない
3．くだらない番組を見ないようにする
4．時間を決めてテレビを見る

もちろん、それ以前の問題としてテレビの台数を少なめにし、テレビのパーソナル化をふせぐ、あるいは親自身もテレビとの接し方にけじめをつけておくなどの態度が必要であろう。

図19　テレビを見るきまり×視聴時間

――視聴時間の長い子は、いつでもテレビを見ている――

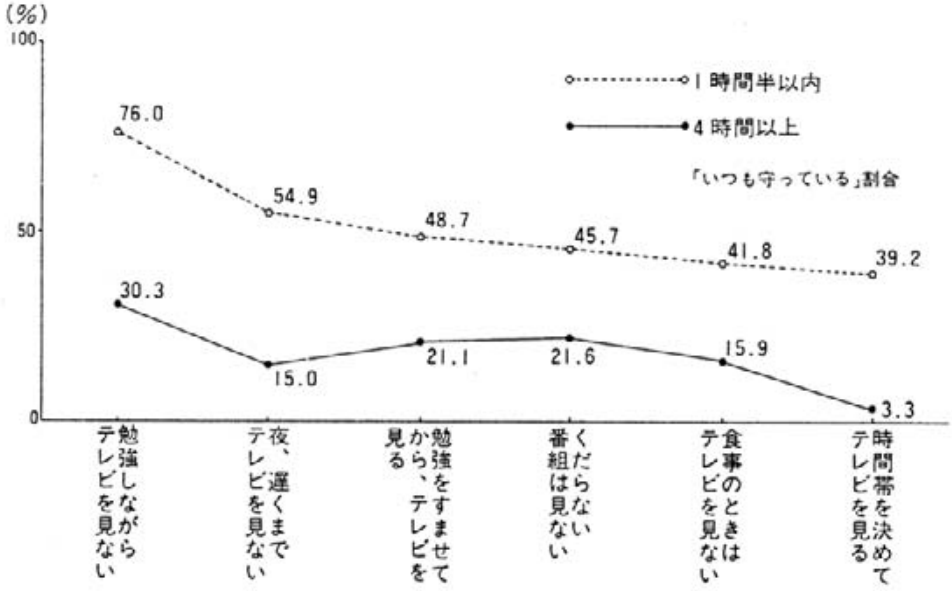


表22　テレビを見るきまり×視聴時間

――視聴時間の短い子は、テレビを見るルールをもっている――

(%)

	1時間半以内		2時間		3時間		4時間以上
1.勉強しながらテレビを見ない	(76.0)	>	54.9	>	38.9	>	30.3
2.夜、遅くまでテレビを見ない	(54.9)	>	34.2	>	21.8	>	15.0
3.食事のときはテレビを見ない	(41.8)	>	26.1	>	21.5	>	15.9
4.くだらない番組は見ない	(45.7)	>	28.1	>	19.3		21.6
5.勉強をすませてから、テレビを見る	(48.7)	>	34.1	>	20.5		21.1
6.1日○○時間というようにテレビを見る時間を決めている	(36.9)	>	13.5	>	5.7	>	3.3
7.時間帯を決めてテレビを見る	(39.2)	>	14.7	>	6.6	>	3.3
8.テレビを見る時間をへらす	(22.2)	>	6.0	>	4.4	>	2.8

「いつも守っている」割合　◯は最大値

まとめに代えて

これまでふれてきたように、子どもの視聴時間は、①テレビの台数②親がテレビ好きか③テレビがつけっぱなしになっているか、などのテレビ環境に規定される部分が大きい。

すでにふれたように、子どもたちも、テレビに節度をもって接しなければとは思っている。しかし、身近にあるだけに、ついテレビを見すぎてしまいがちになる。そうしたとき、親たちが意欲的な生活を送り、テレビを自主的に選択して利用していれば、親の姿を見て、子どもも視聴にブレーキをかけることができる。しかし、親たち自身がテレビにつかりきった生活を送っていたなら、子どももそうした環境にまきこまれて、長時間視聴へとはしりやすい。

子は親を映す鏡といういい方は、現在ではテレビ視聴に、もっともあてはまるように思われてならない。

子どもたちに節度のあるテレビ視聴を望むのなら、まず親自身の視聴態度を点検しなければならないのは、すでに述べた通りである。しかし、そうしたかたちで環境そのものをよくするのと同時に、子ども自身の心のうちに、テレビを選択的に視聴する態度を育てる必要があろう。

特にテレビ視聴時間の長い子は、おもしろさに負けてしまう駄目な自分というイメージを抱いているので、自己像が暗く、無気力な生活を送りがちになる。テレビは決して、テレビだけの問題でなく、子どもの人間形成そのものに関係してくるので、節度をもったテレビとのつき合い方のしつけに、親たちは多くの努力をかたむけてほしいと思う。

※おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。

子ども研究ノート ⑪

海外の子どもたち

放送大学教授
深谷昌志

日本にいると、日本の子どもの生活があたり前のように思え、日本と同じような暮らしを他の国々の子も送っているように考えがちになる。しかし、それぞれの国により、子どもの暮らしにはさまざまなスタイルがある。ここでは、各国共通とも思われるテレビと子どもとの関わりにふれてみよう。

台北の子ども——テレビ30分

昭和62年の12月、国際比較の調査を行うために台北を訪れていた。ホテルで目をさまし、テレビのスイッチをつける。

中国語のテレビだから、何をいっているのかわからないが、それでもニュースならば画面を見ているだけで楽しめそう。そうした気持ちでブラウン管を見つめたのに、いかにも堅苦しそうな内容を放送している。チャンネルを変えてみたが、もうひとつも同じ番組で、残りのひとつがニュースを伝えていた。

空中教学とあったから、さしずめ台湾版の放送大学で、職業柄ていねいに見せてもらったが、会計学や法律、天文学などをたんたんと講義する内容だった。

我田引水になるが、日本の放送大学では45分の中に、ロケや実験などを入れて変化をつけているが、台北の空中教学は講義オンリーのオーソドックスなものであった。

それはともあれ、朝、テレビのスイッチを入れたら放送大学というのはなんとなく味気のない感じがする。もっとも、朝食を食べにいって部屋に戻ると、空中教学もお休みでなんの映像もうつらなくなっていた。

台北には、台湾、中華、中国の三つのテレビ局があるが、いずれも朝のニュースのあと